

軻の浦の伝統的街並みに見られる建築的特徴 —地方都市における街並み景観と色彩に関する研究 (その3)—

山内 一晃・宮川 博恵

On the Architectural Characteristics of a Traditional Façade Design in the
Tomonoura District: A Study of the Relationship Between Façade Design and
Color in a Regional Townscape (part 3)

Kazuaki YAMAUCHI, Hiroe MIYAKAWA

要 旨

福山市軻の浦の伝統的街並みの36建物を伝統、改修、建替の3グループに分類して建築的特徴を考察した結果、伝統グループが60%あり伝統的街並みといっても改修や建替が進行していること、屋根比率と木部比率は伝統グループは高く、建替グループはゼロに近く、改修グループは中間を示すこと、伝統グループの40%は店舗営業のため外壁改修の際、格子、腰板などの伝統的要素をうまく活用していること、建替グループは3階建てで1階を掘込式駐車場とした例が多く、伝統的街並みの中で異彩を放っていること等が明らかとなった。伝統的建物は狭い間口から広い間口まで様々な大きさの建物が、ある程度棟高を揃えて造られてきたのに対し、改修や建替では間口の狭い建物を部分改修や3階建てなどとして居住空間を拡大してきたといえる。青空駐車場の存在は、建物の老朽化対策と生活利便施設の確保が、街並みの保存と継承における困難な課題を提示している。

キーワード：街並み、景観、伝統、保存、継承

1. 研究目的

西日本の地方都市には竹原、柳井、岩国、三次等々、伝統的街並みや生活風土が今も連綿と受け継がれ、人々の日常生活の中に溶け込んでいる地域が数多く残っている。こうした地域には、街並み景観と建築の色彩、及び人々の生活や服装に現れる色彩との関連性が認められ、街並み景観はその地方が培ってきた歴史風土や文化資産として重要な価値を内包している。本稿は既報^(文1)に引き続き、広島県福山市軻の浦の伝統的街並みを取り上げ、そこに見られる建築的特徴を明らかにしようとするものである。

2. 研究方法

軻の浦は広島県福山市軻地区の沼隈半島南端に位置し、江戸時代から栄えた港町(図-1)であり、沿岸部一帯は「軻公園」として国立公園に指定されている。軻には古い街並みが多く残

り、「常夜燈」、「雁木」、「波止場」などが観光資源として多くの観光客を集め、江戸時代に描かれた町絵図の街路もそのまま残り^(文2)、鞆一体はこうした当時の町の有り様が現代の街に時代を超えて継承されている数少ない地域である。本稿はこのうちひら久商店、潮待ち茶屋、北山太陽堂薬局等の歴史的建造物が残る、鞆城山公園と海岸線に挟まれた、東端の港口バス停から西へほぼ一直線に伸びる長さ約300mの街並みを対象とし、この通りに面した北側建物36棟について現地調査する。通りの幅員は平均4.8m（3カ所実測の平均値）である。対象建物の大半は切妻屋根、格子窓、漆喰壁、土壁、板張り、木造軸組が露になった伝統的景観を呈し多くは2階建てである。所々に建替又は改築されたと思われる新興建物が散在し、街並みの中断や不連続がみられる。そこで、鞆の浦の街並みの建築的特徴を把握する手掛かりとして以下の6要素を設定する。①建物見附面積（立面図としての面積）、②屋根面積（勾配屋根の場合、立面図としての屋根面積）、③開口部面積（窓と出入口）、④木部面積（柱、貫、板張り等）、⑤外壁面積（上記①から④を差し引いたもの）、⑥外壁仕上材料である。求積根拠としては、撮影した建物写真を元に作成した建物立面図を用いる。写真撮影は通りの反対側に三脚付きカメラを据え、建物足元から屋根頂部までが画面内に納まるように撮影、間口が広い建物は数枚連続撮影した写真を研究室に持ち帰りパノラマ合成¹する。カメラレンズの高さは地面から1.35mとする。

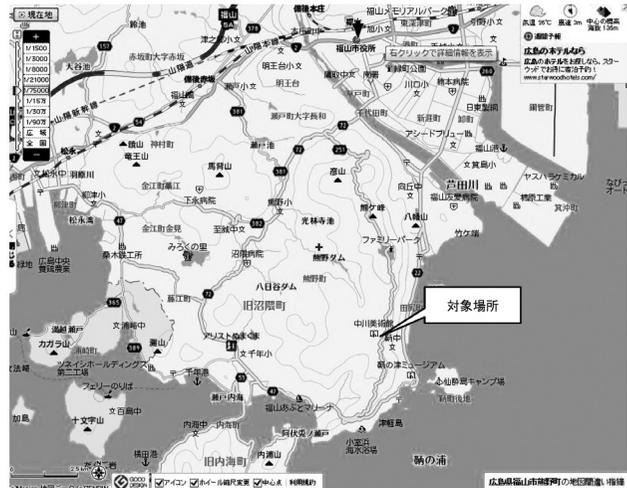


図-1 鞆の浦付近見取図（出典：マピオン）

次に建物立面図の作成について説明する。予め建物の出入口高さ又は庇先端高さを実測しておき、撮影した写真の同じ部位に定規を当てて寸法を測定し、写真の縮尺率を算定後、窓、屋根、軸組等の位置、寸法を割り出して立面図を作成する。立面図の描画方法は幅840mmの長尺巻トレーシングペーパーに、街並みの東端建物をトレペーの右端に配置して順次右から左へと手書き（フリーハンド）で描き進め、長さ300mにわたる鞆の浦街並み景観全体立面図を作成する（図-2）。図面縮尺を1/50としているので、図面長さはおおよそ6mとなる。尚、この全体立面図の作成は久保井侑の卒論^(文3)の成果である。

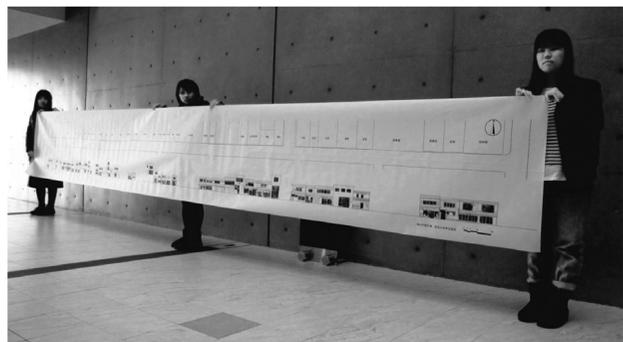


図-2 鞆の浦街並み全体立面図（長さ約6m）

¹ 合成ソフト名：マイクロソフト社ウィンドウズ・フォトギャラリー

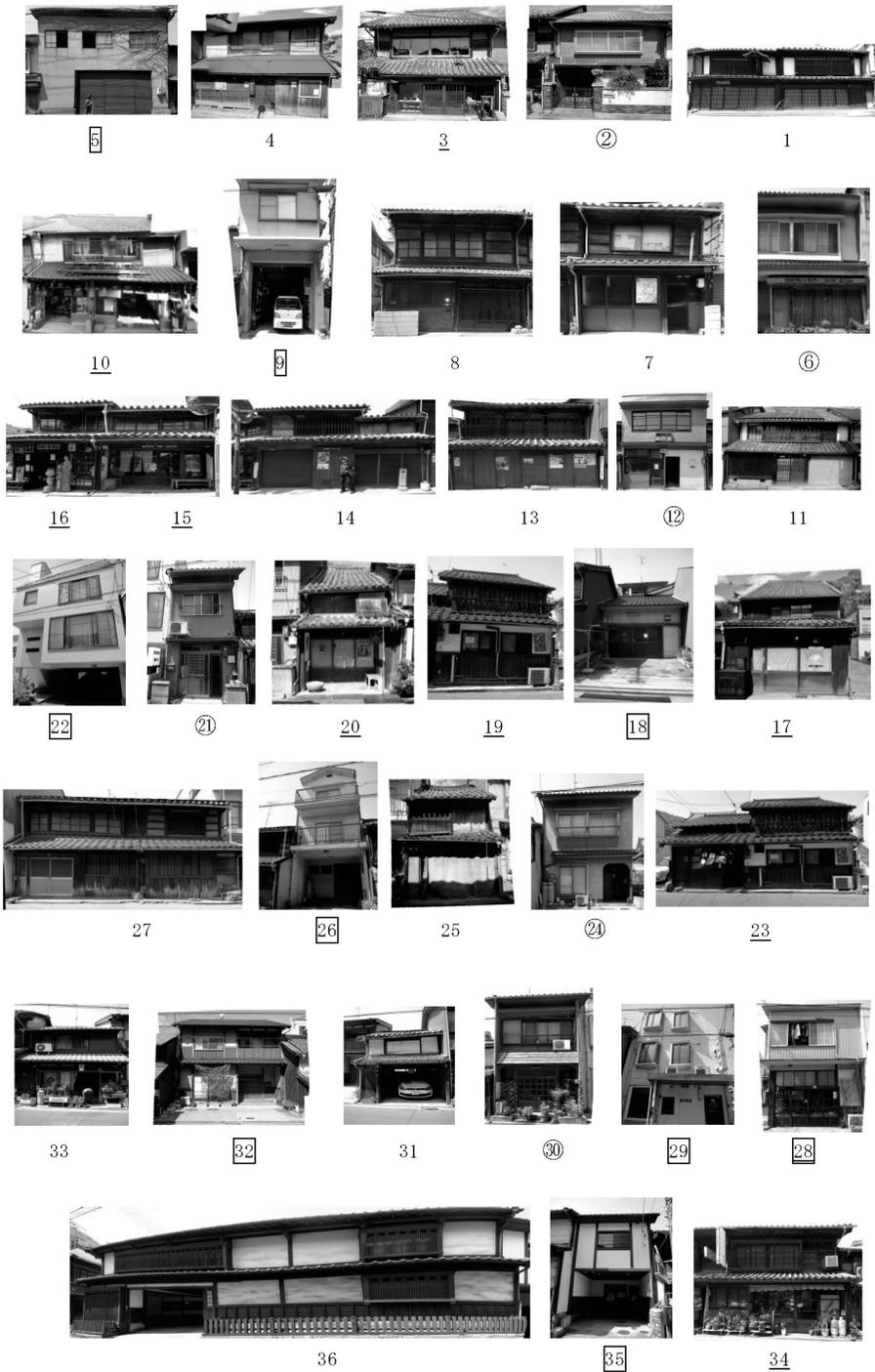


図-4 調査対象の36建物外観写真

36建物の①見附面積、②屋根面積、③開口部面積、④木部面積、⑤外壁面積の平均値を図-5に示す。見附面積は平均39.20㎡、これは建物正面の大きさとして概ね間口6m*棟高7m程度の規模となる。開口部面積は平均13.74㎡で3グループともほぼ同値を示すが、建替グループは見附面積と外壁面積が大きい割に屋根面積が小さく、屋根なし3階建てとした建替の影響が伺える。改修グループと建替グループは木部面積がゼロに近く、逆に伝統グループは屋根面積と木部面積が大きく外壁面積が小さい。次に見附面積以外の4要素について面積構成比をみると(図-6)、3グループともに開口比率は40%程度であるが、建替グループは外壁比率が50%と高く屋根比率、木部比率が小さい横長の形状を示すのに対し、伝統グループは屋根比率、木部比率が高く、その分外壁比率が13%と小さくなり四角い形状を示し、改修グループは屋根を継承すること

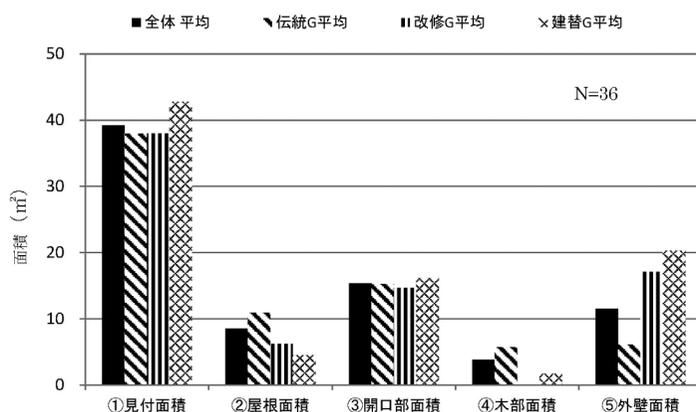


図-5 3グループの各面積の平均値 (単位: ㎡)

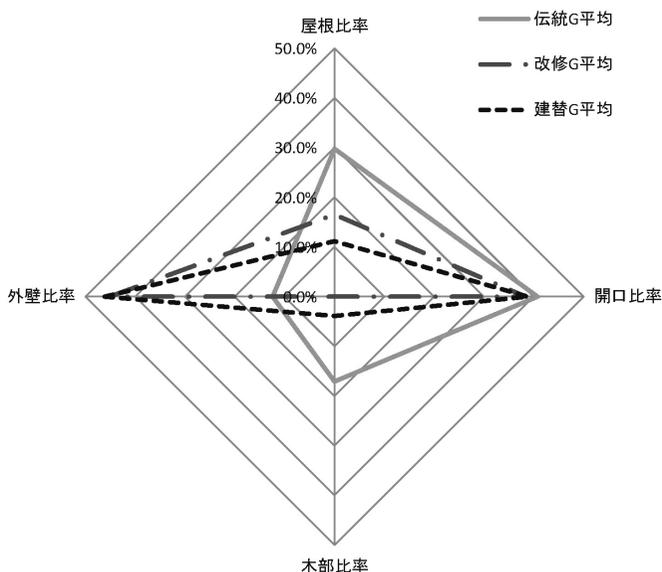


図-6 3グループ別の面積構成比率 (%)

で伝統グループとの類似性を保つが、軸組や板貼りの木部が殆どみられず、建替グループと同様の傾向を示す。即ち、改修グループは伝統、建替グループの中間的な外観を呈し、どちらかといえば建替グループに近いが、伝統グループは改修、建替グループとは明らかに異なる伝統的な観を呈しているといえる。

表-2 間口と高さの平均と標準偏差 N=36 単位:m

	伝統 G		改修 G		建替 G	
	間口	高さ	間口	高さ	間口	高さ
平均	6.5	5.7	5.5	7.0	5.4	7.6
標準偏差	3.11	0.75	1.77	0.50	1.56	1.68
最小値	3.3	4.1	3.6	6.4	4.0	4.2
最大値	15.7	7.1	8.4	7.6	8.2	9.6

36建物の間口寸法と高さ寸法（棟高）の集計では（図-7、図-8）、間口の平均6.1m、標準偏差2.60、高さの平均6.4m、標準偏差1.33となり、前述の見附面積の平均39.20㎡と符合する。グループ別の間口寸法を見ると（表-2）、伝統グループは3.3mから15.7mまで幅広く分布しているのに対し（平均6.5m、標準偏差3.11）、改修グループは3.6mから8.4m（平均5.5m、標準偏差1.77）、建替グループは4.0mから8.2m（平均5.4m、標準偏差1.56）と狭い範囲に分布している。一方高さ寸法を見ると、伝統グループは4.1mから7.1m（平均5.7m、標準偏差0.75）に分布するのに対し、改修グループは6.4mから7.6m（平均7.0m、標準偏差0.50）、建替グループは4.2mから9.6m（平均7.6m、標準偏差1.68）とやや高い値で広い範囲に分布し、特に建替グループは高値側に偏った分布を見せる。間口寸法と高さ寸法の散布図を図-9に示す。伝統的建物は狭い間口から広い間口まで様々な大きさの建物が、ある程度棟高を揃えながら造られてきたのに対し、改修や建替建物では比較的間口の狭い建物を対象として、部分改修や階高を大きくしたり3階建てにしたりして居住空間を拡大してきたことがうかがえる。このことは間口が広く規模の大きな伝統的建物は、経済的理由や意匠上の制約から改修や建替が困難であったことを示唆するものでもある。

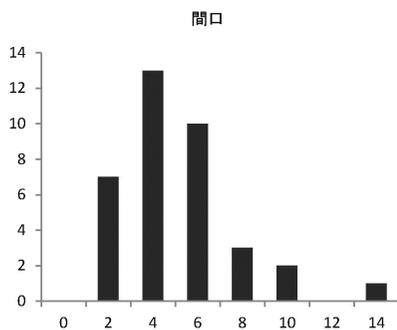


図-7 間口寸法（数値は階級下限値を示す：m）

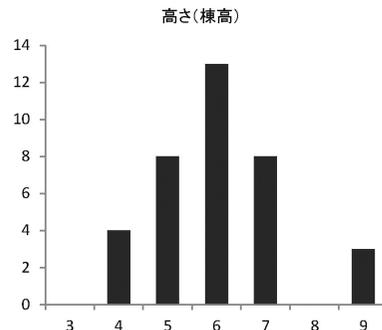


図-8 高さ寸法（数値は階級下限値を示す：m）

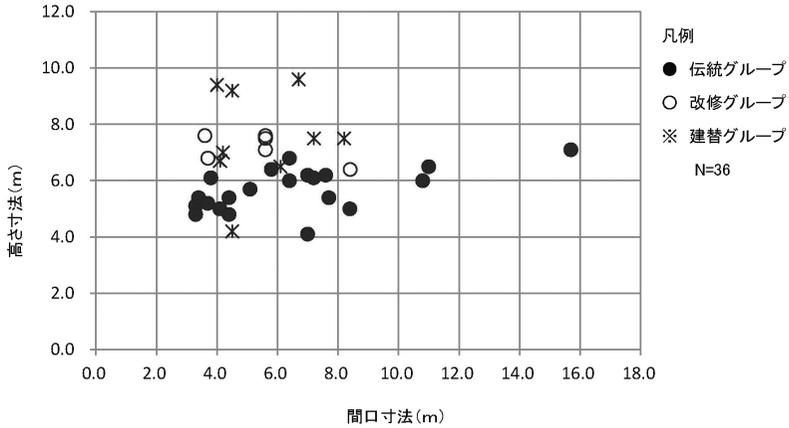


図-9 間口と高さの散布図

この街並みには食事処、酒屋、雑貨屋など1階で店舗営業している建物が10例あり（図-4 アンダーライン）、このうち9例が伝統グループに属している。この10例の見附面積に対する開口比率は平均43.2%で全体平均39.9%を僅かに上回る程度で、特に店舗を併設したからといって開口比率が高くなっているわけではない（図-10）。これらの建物は1階の間口全面を引違い戸としたり、一部外壁に窓を設けたりして店舗として極力開放的な造りとする一方、こうした窓や出入口の建具は透明ガラスに和紙を貼付けたり、腰板があったり、内部に障子を取付けたりして透明性の制御を行っており、建具の開閉具合によっても開放性の調節を可能としている。このことは和風引違い戸の柔軟性を上手く利用した使い方であり、既報^(文1)の広島市本通りの店舗にみられる、嵌殺し透明ガラススクリーンと建具なし出入口の開放性とはまた違った外観を呈し、鞆の浦の伝統的街並みにおける店舗外観の特徴といえる。これらの店舗併設建物は、道路に面した1階部分を住居から店舗へ転換する際、建具や外壁が改修されたと考えられるが、木製建具、

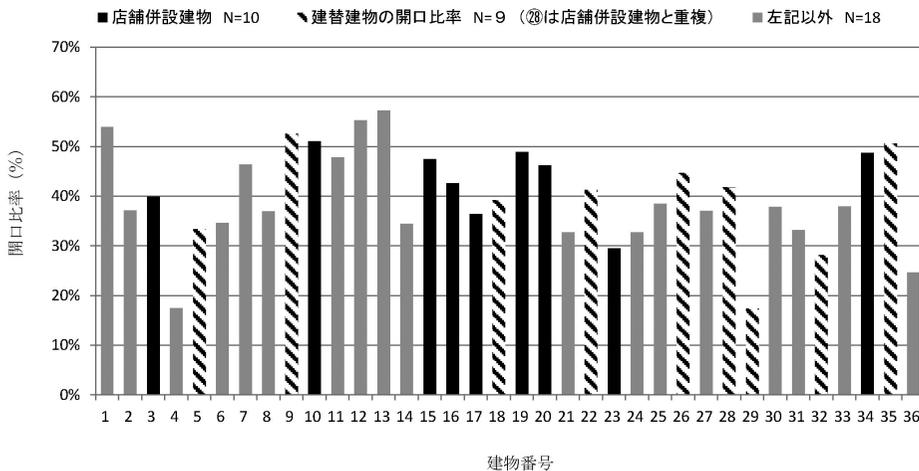


図-10 36建物の開口比率

障子、板壁などの伝統的構成要素をうまく取り入れ、周辺街並みとの調和に配慮をしていることがうかがえる。これらの建物は、改修を伴うという意味においては改修グループに属することになるが、本稿では現状の外観特徴を重視して伝統グループに分類している（建物番号⑳のみ改修G）。建替グループの見附面積に対する開口比率は38.8%であり、屋根や木部が殆ど無い割には高値を示す。これは1階が掘込式駐車場やシャッター付駐車場となっている影響が大きく、建替という行為が単に老朽化による生活空間の機能更新というだけでなく、生活上必要不可欠な駐車場増設を伴う行為であることを物語るものである。ここには、伝統的街並みの保存継承と日常生活の利便性の確保との両立をどのようにして推進するのが良いのか、多くの街並み保存地区が抱える共通の課題が垣間見える。

次に、木部に注目してみる（図-11）。伝統グループでは窓や出入口の建具に格子・腰板などが頻繁に用いられており、こうした木製部分は、街並み景観の観察者にとっては見る角度により一種の板壁と映り、特に前面道路が狭い場合にはその傾向が強く、柱梁の軸組の木製部分と同様の印象を強く感じさせる。そこで、格子窓や腰板付建具の開口部を改めて木部とみなして木部面積を算定し直すと、伝統グループ21例の木部比率は48.7%となり図-6に示す17.3%を大きく上回る。一方、改修グループと建替グループの木部比率は、建具にアルミサッシや鋼製扉が多用され、格子や柱型などの木部は限られた建物にのみ使われ（改修グループでは㉔の22.2%、建替グループでは㉒の38.7%）、大半の建物の木部比率は0%である。即ち、改修建物では外壁を大壁構造としたモルタル掻き落としやリシン吹付け仕上などが多く採用され、軸組あらわしや板貼りなどの意匠は見られず、建替建物ではコンクリート打放しリシン吹付けやALC版吹付けタイル仕上などが多く採用され、木部がほとんど使用されていない。このことから、元々は伝統的街並みを構成していた建物群が、改修や建替の際にその時代に応じた近代的な外観に更新され、次第に伝統的街並みの風情が失われていったことが推察される。

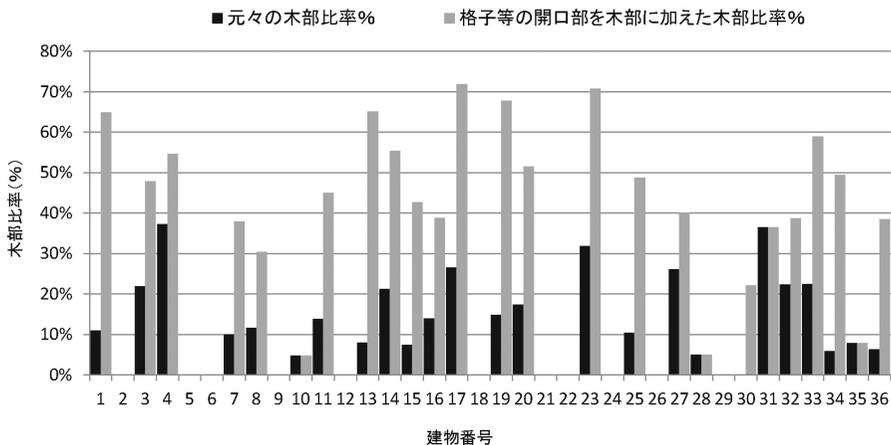


図-11 36建物の木部比率

4. 結 論

福山市鞆の浦の長さ約300mに及ぶ伝統的街並みを対象として、道路北側の36建物を撮影した写真をもとに街並み景観全体立面図を作成し、これらの建物を建物外観の観察結果から伝統グループ、改修グループ、建替グループに3分類し、①見附面積、②屋根面積、③開口部面積、④木部面積、⑤外壁面積の5項目を求積して相互関係を分析し、以下の結論を得た。

1. 伝統グループがおよそ60%、改修と建替グループでおよそ40%となり、伝統的街並みといっても改修や建替が進行している。
2. 1建物あたり概ね間口6m*棟高7m程度の規模であり、多くは木造2階建てである。
3. 開口比率（見附面積に対する開口部面積比率）は3グループともおよそ40%と同値を示す。
4. 伝統グループは屋根比率、木部比率が高く、開口比率と外壁比率を合わせたレーダーチャート図では四角い形状を示すのに対し、建替グループは屋根比率、木部比率がゼロに近く、外壁率が高く、レーダーチャート図では横長の扁平形状を示し、改修グループはその中間を示す。
5. 伝統グループのうちおよそ40%が1階で店舗営業しており、住居から店舗への用途転換の際建具や外壁を改修しているが、格子、腰板、漆喰壁などの伝統的構成要素をうまく活用して周囲の街並みとの調和を図っている。
6. 改修グループは屋根形状を継承しつつも、外壁は大壁構造にリシン吹付け仕上、建具はアルミサッシが多用され、1階正面は従来の面影をとどめた外観となっている。
7. 建替グループは3階建てで1階正面を堀込式駐車場とした例が多く、建具はアルミサッシや鋼製扉などを使用、外壁仕上げはリシン吹付けや吹付けタイルとなっており、伝統的街並みの中で異彩を放っている。

伝統的建物は狭い間口から広い間口まで様々な大きさの建物が、ある程度棟高を揃えながら造られてきたのに対し、改修や建替では比較的間口の狭い建物を対象として、部分改修や3階建てにするなどして居住空間を拡大してきたことがうかがえる。鞆の浦の街並みには、空家となって廃屋同然の建物が僅かに存在するとともに青空駐車場が2ヶ所ある。青空駐車場は街並みに空白をもたらす街並みの不連続を作り出すが、住人にとっては生活利便施設の確保が街並み保存よりも優先するという事実を物語っている。伝統的街並みの中にどのように駐車場を組み込めば良いのか、その手法が今求められている。建物の老朽化や街並みの不連続は、人々がそこで生活を営む限り避けられない問題であり、伝統的街並みの保存と継承の困難さを露呈している。

鞆の浦の街並みは、今でこそ伝統的という接頭辞を付けて呼称されるが、江戸時代の交易が盛んな頃には蔵や豪商の住宅が立ち並び、殷賑を謳歌する時代の先端を行く先進的な港町であった。それが今日では伝統的街並みと呼ばれている。即ち、当時の革新が今日の伝統を作り上げたといえるのである。現在、重要伝統的建造物群保存地区は全国で109地区あり（H26.12）、広島県では呉市豊町御手洗（港町）と竹原市竹原地区（製塩町）の2ヶ所が選定されているが、鞆の浦地区は選定されていない。こうした伝統的街並みは全国至る所に数多く存在し、人々の生活の中で脈々と受け継がれている。時代の進展とともに家族構成やライフスタイルが変化し、社会構造も変容していく中で、私たちは伝統的街並みをどのように継承し、どのように新機軸を打ち出せば良いのか、自問自答しながら試行錯誤を繰り返しているのが現状ではないだろうか。そこには

伝統と革新，過去と未来といった時間軸では単純に把握できない状況が横たわり，不易流行の精神で時代を見通す眼を養うことの重要性が問われている。

5. 今後の課題

道路南側の街並みについても同様の調査を実施し，両側の街並みを対象として建築的特徴を考察することが望まれる。今回の伝統グループの中には改修建物も存在し，改修グループの中にも建替建物が存在することを踏まえ，建物の築造年代や改修，建替の時期や理由，当初の建物外観が把握できれば，人々の生活とともに歩んできた街並みそのものの変遷を知ることができ，今後の街づくりの指針となりうる。ギリシャのサントリニ島やスペインのミハスのように，建物の外観デザインから窓や扉の仕様，植栽，ペーブメントに至るまで，街並み構成要素に対して細かくデザインコードを規定して，街ぐるみで伝統的街並みを保存継承している地域があることに鑑み，こうしたデザインコードの有効性についても議論を深めることが必要ではないだろうか。長野県小布施町や代官山ヒルサイドテラスなど，1人の建築家が長年に渡って築き上げてきた良質な街並みには，こうしたデザインコードに近い考え方が感じられ，これからの街並み景観が目指す一つのお手本となりうると思われる。

参考文献

- 文1 山内一見，宮川博恵「商店街の街並みに見られる建築的特徴（広島市本通りの場合）」，安田女子大学家政学部生活デザイン学会誌，2013.2
- 文2 三浦正幸「軀の浦を歩く」，南々社，2010.5
- 文3 久保井侑「伝統的街並みの建築的特徴と全体立面図の作成」，安田女子大学卒論，2014.1

[2015. 6. 25 受理]